



第一羽 怪鳥コケッコーンとの戦い

町は過疎だった。しかも、住民は高齢者がほとんどであった。産業と言え、農業が主体で、その農業も、米作が中心にも関わらず、毎年、減反、減反が続けられ、米作での経営が出来ない状況に追い込まれた。農家は、野菜を作ったり、牛を飼ったり、鶏を飼育したりするなど、必然的に多角経営を行い、自らの生活の糧とするとともに、人口の集中している都会に食糧を供給していた。

ある日、減反による休耕田や高齢化による農業ができない荒れた畑のため、広大な敷地があり、かつ、人があまり住んでいない、また、過疎化の町を活性化するという理由で、○△□工場が建設された。当初、町は、雇用の機会が増え、若者たちが街に出なくてもいいこと、出ていった若者たちが、子どもを連れて帰って来たこと、道路や公共施設などが整備されることで喜んでいて、ある日、○△□工場が爆発し、人間はもちろんのこと、あらゆる生物の生命に致命的な影響を与える汚染物質が放出された。

汚染された地域からは、まず、本能的に、異常を感じた鳥や虫、猿や猪、狸にキツネなど、野性の生き物が逃げた。その後、テレビやラジオ、携帯電話、避難勧告を発する役所の車やヘリコプターからの呼び掛けを聞いて、元気な若者たちは自分自身の力で逃げた。未来のある子どもたちは役所等がバスを手配して、救出した。足腰が弱ったり、痴呆がかかったおじいちゃんやおばあちゃんたちは、近所の人の手を借りて、なんとか逃げた。

犬や猫などのペットは、飼い主と一緒に逃げた。だが、家畜として飼育されていたニワトリは逃げ出せなかった。飼育者が、自分が逃げるのに精一杯で、また、どうせ、すぐに戻って来られるだろうという安易な考えからか、鍵をはずさなかったからだ。汚染物質に侵された鶏舎。次々と、ニワトリたちが死んでいく。その中でも、生命力にあふれたニワトリは生き残った。ニワトリは、穀物などの餌がなくなると仲間たちの死体を食べた。また、自分が産んだ卵を食べるニワトリもいた。

五万羽以上いたニワトリも、とうとう一羽になった。だが、その一羽も、これまで汚染物質に耐え抜いてきたが、とうとう力尽き倒れた。その時、卵を一個産んだ。卵は、母親が死んだものの、まだ温かい死体に保護された。おかげで、卵は守られ、中の生命は成長できた。卵にひびが入った。

中からは生まれたヒナは、汚染物質を平気で食べ、どんどんと成長した。母親のおかげで、汚染物質を栄養として消化できる耐性ができたのだ。ヒナの体は、DNAが変化したのだろうか、豚の大きさになり、牛の大きさになり、鶏舎の大きさになり、森の大きさなるまで、巨大化した。

怪鳥コケッコーンの出現だ。暴れ出したコケッコーンは、もう既に、庭鳥じゃなく、町鳥でもなく、国土を崩壊させるほど、凶暴な、国取りになっていた。町の人々はもちろん、都会の人々も、汚染物質と汚染物質に侵されたコケッコーンから逃げ惑うしかなかった。まさに、前門の汚染物質。後門のコケッコーン。今、まさに、町が、都会が、国が滅びようとした時、空にひとつの閃光がきらめき、正義の味方が現れた。

バナナマンだ。バナナこそ、あらゆるエネルギーの源だ。そのエネルギーの象徴であるバナナマンが、今、巨大化したニワトリ、怪鳥コケッコーンに立ち向かう。だが、自分の体の数百倍、数千倍もあるコケッコーンの前では、バナナマンは無力であった。しかし、バナナマンはあきらめなかった。持っていたバナナ一房を全てたいらげるや否や、バナナマンは巨大化した。

目の前に忽然と現れた巨大なバナナマン。コケッコーンはその存在を嫌悪した。また、自らの存在も嫌悪していた、コケッコーンはバナナマンに向かって赤い嘴を突きたてる。バナナマンは、黄色い防御スーツを着ているため、皮膚が嘴で傷けられなかったものの、大きな穴が開いた。恐るべきコケッコーンの攻撃。

バナナマンは後ろに飛び下がる、バナナマンの体はまだ黄色だ。バナナブーメラン。バナナマンは、自らの体をブーメラン化して、コケッコーンに体当たりをする。海岸線のような反った体がコケッコーンの首に当たる。

ゲホゲホ。呼吸ができない。

あんなに勇ましく「コケッコーン」と雄叫びを発していたコケッコーンから声が消えた。だが、汚染物質によって、何十万、何百万の仲間を失い、その怒りから生き延びたニワトリだ。たかが、バナナブーメランの攻撃でひるむわけにはいかない。俺の後ろには、仲間の亡霊がついているんだ。そう思ったかどうかはわからない。

コケッコーンは、「コーッココ」と鳴きながら、どこを見ているかわからない目で、相手を油断させ、首を前後に振り、バナナマンの体に嘴を突きつけ、刺した。防御スーツでは、コケッコーンの嘴にはかなわないのだ。

コケッコーンは、嘴ごとバナナマンを持ち上げ、振り投げる。バナナマンは吹っ飛び、近くの山に体当たりした。体当たりの場所が違わず、バナナマン。そのため、町の人々が、何十年もの歳月をかけて植林したヒノキや杉の木々が押し倒された。

「何てことするんだ」

町民たちの怒りの矛先は、何故か、バナナマンに向けられた。直接的に、植林を倒したバナナマンが悪いのか、バナナマンを投げ倒すことによって間接的に植林を倒したコケッコーンが悪いのか、よく考えてみよう。

ともかく、体中、傷だらけバナナマン。防御スーツに黒い斑点が浮かび出した。バナナマンのエネルギーがなくなりだしたのだ。このままスーツが真っ黒になれば、バナナマンの体中が柔らかくなり、とけてしまう。急げ、バナナマン。時間はないぞ。傷だらけのまま立ち上がったバナナマン。

再び、全身を使ったブーメラン攻撃だ。だが、脳ミソも巨大化したコケッコーン。同じ手は二度と喰わない。反対に、バナナマンを喰おうとした。体に突き刺さる嘴。痛みをこらえるバナナマン。危うし、バナナマン。

コケッコーンの嘴がバナナマンの体を貫こうとした瞬間、バナナマンは、スルリと防御スーツから脱出した。コケッコーンの嘴にはバナナの皮、じゃなくバナナスーツがぶら下がるのみ。こんなもん喰えるか。コケッコーンは、嘴からスーツをほおり投げると、バナナマンの後を追いかけてしようとした。

その時、同じ手は二度と喰わないコケッコーンだが、初めての出来事には弱かった。自分が投げ捨てたバナナスーツを誤って踏んでしまった。コケッコーンは、足がすべり、汚染物質の工場に崩れ落ちた。汚染物質を食べ、耐性が出来たコケッコーンだが、純度百パーセントの汚染物質には耐えられなかった。汚染物質を飲み込み、苦しみのあまり七転八倒だ。

「そら、バナナマン」

エネルギーが切れかけたバナマンを助けようと、日本警備隊のジェット機がバナマンに食事を渡した。フライドチキンだ。バナナマンは、油のしたたるフライドチキンをむさぼり食べる。バナナマンは、菜食主義だが、力を発揮するためには、たまには肉も食べないといけない。

「バナッチ（バナナ語を日本語に翻訳すれば、少し辛いな。こりゃ、ニンニクが効きすぎだ。食後に甘いデザートが欲しいな。やっぱりデザートはバナナだ）」と言いながら食べ切ると、見る見るうちに顔色が、体中が黄色くなった。元気を取り戻した証拠だ。よかった。

みなぎる力は百パーセント。バナナマンは、胃の中のフライドチキンの油の成分をだけを抽出すると、コケッコーンに吹きかけた。壊れた工場から火の手が上がっていた。その火が油に引火し、コケッコーンの全体を包んだ。

燃え上るコケッコーン。怒りで顔やトサカが真っ赤だったのに、熱さでも全身が真っ赤になる。このままでは巨大な焼き鳥だ。最近、巷では、独特の調味料で味付けした親鳥やひなの足を焼いた料理が好評であるが、全身丸焼けの鳥は果たしてどうであろうか？

そんな目には合わないぞと、コケッコーンは火を消すために海に飛び込むと、そのまま沈んでしまった。様子を見守るバナナマンに日本警備隊と住民たち。ついに、コケッコーンは海から浮かびあがって来なかった。バナナマンの勝利だ。日本警備隊と住民たちからの拍手の海。

だが、バナナマンに笑顔はなかった。コケッコーンがすべって転んだスーツを着ると、「バナッチ（翻訳不能）」の掛け声とともに、空高く飛び去って行った。町の人々は、バナナマンに感謝するとともに、不幸なコケッコーンを憐れんで、海に花束を流した。

「もう。終わったんでしょ？テレビを消しなさい」

台所からのママの声。僕はリモコンでテレビのスイッチを切った。

「さあ、飯にするか」パパが頭をタオルで拭きながら風呂から出てきて、冷蔵庫を開ける。

「おっ、今日は、タラコスパゲティか」缶ビールのプルタブを開け、ひと口飲みながら、テレビを点ける。

「食事の時間ぐらいは、テレビを消してよ」ママからの言葉。

「ニュースぐらいいいだろう。時代に取り残されるぞ」

テレビでは、どこかの国の工場が爆発して、街が焼け野原となり、人々が避難するなど、大災害が起こっていた。

「こりゃすごいなあ」パパは、片手にビールを持ったまま、見つめている。

「さあ、出来たわよ」ママがピンクのタラコが載ったお皿を置いた。

「いただきまあす」僕はフォークを掴むとスパゲティをぐるぐる巻きにして、口の中に入れる。スパゲティは、口の中で、すぐにほどけて、胃の中に流れ込んでいった。

「パパも、熱いうちに食べてよ」

「うん」パパは相変わらず、テレビの画面に釘付けだ。画面の中では、記者が避難者に質問し、避難者は困っている状況を説明していた。

「バナナマンがいたらいいのに」僕はぐわっと口の中にスパゲティを押しこみながら呟いた。

「これは現実よ」ママからの言葉。

「本当だなあ。バナナマンがいたらいいのになあ」パパは缶ビールを飲み干すと、「いただきます」と手を合わせ、食べ始めた。

災害の画面は、何事もなかったかのように、テレビの中に吸い込まれた。

「おいしい？」ママからの強制力を持った言葉だ。

僕とパパは同時に叫ぶ。「おいしい」

このおいしさが僕の体の中の栄養素になるなんて、なんて無駄がなく、効率的なんだろう。食後、僕は二階に上がり、自分の部屋で勉強した。算数の宿題だったが、バナナマンのように、スパゲティパワーで難問を解答することができた。

「おーい。デザートだぞ」パパからの言葉が一階から聞える。これは、多分、ビールのパワーだろう。声から少しアルコールの匂いがする。陽気な声だ。

僕は階段で降り、家族と一緒にメロンを食べた。このメロンのエネルギーを借りて、今度は、マンガを読破するんだ。メロンエネルギーが爽やかな薄緑色から蛍光灯の薄赤色に変わる頃、僕の部屋も頭も真っ暗になった。

第二匹 怪亀 カメダイとの戦い

怪鳥コケッコーンとの壮絶な戦いが終わり、数か月が過ぎた。町は、少しずつだが、復興しはじめていた。破壊された建物は全て撤去され、新たに家やビル、学校などが建設された。町には人が戻って来た。店が開かれ、バスが走り、ニワトリが飼われ、野菜が栽培され、工場では製品が作られた。だが、幸せは長く続かなかった。

ウーウーウー。港から警報が鳴り響く。港の沖の海が異様に盛り上がっている。ひと山もあるほどだ。

津波だ。それも今まで経験したことがないような大津波だ。漁から戻って来た漁師たちが「逃げろ。みんな、逃げろ」と大声を上げている。

「地震か」「いあや、そんなニュースは聞いていないぞ」慌てて逃げようとする人々。もちろん、手ぶらだ。中には、荷物をとりまとめようとしている人もいるが、「そんなもの置いておけ。命までもっていかれるぞ」の言葉で我に返る。

自分で歩けるものは、より高い場所へと逃げる。足腰の弱った老人たちを車に乗せて逃げようとしても、みんなが一斉に逃げようとしているため、車が渋滞し、動かない。このままでは駄目だ。運転手は、急いで車のドアを開け、お年寄りを背負う。

子どもたちは、学校の先生に引率され、「早く、早く」の声にせかされ走る。中には、転んで泣きだす子もいるが、近くの大人が抱きかかえ、一緒に走る。まだ、住民たちの半数程度しか高台に避難できていない。この避難所もすぐにいっぱいになるだろう。人々はより高い場所を目指して移動する。

「すごい」「ああああ」

避難所から港を見ると、もうすぐそこまで波が押し寄せて来ていた。波は堤防のはるか高く上で、町で一番高い三階建ての小学校の校舎を飲み込んでしまいそうだ。しかも普通の波じゃない。何かが海を身につけ隠れているようだ。このままでは、町が全滅してしまう。

「バナッチ」

大声とともに一条の光が港に落ちた。立ち上がったのはバナナマンだ。もう既に巨大化している。だが、今度の相手は自然だ。津波相手に戦えるのか。それも津波の高さはバナナマンの身長よりも高い。そこだけ異様に盛り上がった波だ。バナナマン一人で大丈夫なのだろうか。空からは、地球防衛隊（怪鳥コケッコーンとの戦いの教訓から、組織が強化され、地球全体を守る組織となった）ジェット機が旋回している。

バナナマンは腰を落とし、両手を横に構え、上下に合わせると、「バナナチップ」と叫んだ。バナナマンの手から手裏剣のように、バナナを輪切りにしたチップが飛んで行く。チップが波に当たる。だが、チップはたやすく波の壁に弾き飛ばされた。波の中に何かがある。とんでもない何かがある。

バナナマンは突然走り出すと波に体当たりした。ブアアーン。バナナマンと何か衝突した。波の噴水が飛び上がる。数十メートル高さだ。高台の避難所から手を伸ばせば届くくらいに思えた。だが、実際には届かない。波の花火。水の花火。今、まさに、町を飲み込もうとしている

、壊滅させようとしている大波だが、噴水のように飛び上がった波は美しかった。不謹慎なぐらい美しかった。思わず手を叩き、拍手してしまうほど、美しかった。人々は避難所にいることも忘れて魅入ってしまった。

空に高々と持ちあがったが海柱は、雲の真ん中を突き刺すと、パッと散った。大人の誰かが、串に刺した焼き鳥のようだと叫んだ。ある子どもは、串に刺した団子のようだと声を上げた。どちらも正しいようで、正しくない。雲は雲であり、海柱は海柱だ。だが、お腹が空いた者にとっては、そう見えたのかもしれない。

海水の雨が降って来た。海柱から避難所までかなりの距離があったにもかかわらず、人々の頭に海水が降りかかった。「しょっぱい」「からい」保育所の園児や小学校の低学年児たちが、雨を舐めて顔をしかめている。

「こらこら、汚いから雨を舐めてはいけませんよ」先生が注意する。

「だって、お腹が空いたもん」そう、津波は昼前にやってきた。

子どもたちはまだ、給食を食べていなかった。もちろん、大人たちもだ。みんな、逃げることで精一杯で、昼ご飯を食べることを忘れていたのだ。海水の花火を見て、心が落ち着き、お腹が空いていることに今さら気がついたのだ。そうすると、先ほどの、焼き鳥や団子の比喻も、あながち間違っていない。

「やっぱり、人間は、何か喰わなきゃな」

子どもたちと先生の話を聞いていたおじいさんが呟く。だが、みんな、津波から逃げることで一生懸命で、食べ物なんか、一粒の米も持っていない。

海水の雨がひとしきり降った後、津波の正体が判明した。巨大なカメだった。ビルで譬えれば十階ほどの高さだった。もちろん、この町で一番高い建物は、三階建ての小学校だったので、十階建てがどれくらいの高さなのかは、人々にはぴんとはこなかった。

「カメだ。カメだ」子どもたちは、巨大なカメを初めて見た恐怖のためか、それとも、喜びなのか、大声を上げ、騒いでいる。常に、感情は、二律背反である。

巨大なカメとバナナマン。二つの巨大生物が、港の浅瀬で対峙している。巨大生物の前では、人間が労力の限りを尽して作った造営物でも、ミニチュアセットのように見える。

「校長先生！どうして、カメがあんなに巨大化したのでしょうか」

町長が小学校の校長に尋ねる。校長先生は、理科が専門だった。

「私にもわかりません。ひょっとしたら、海に流れた工場の汚染物質や海に消えた怪鳥コケコッコーンを食べて、巨大化したのかもしれない」

「なるほど、それで、怪鳥コケコッコーンの死体が浮かび上がってこないのですね」

「あくまでも推測です。でも、そうだとしたら、巨大化しているのはあのカメだけではないかもしれません」

「すると、先生は、海の生物すべてが巨大化していると言うのですか？」

「それはわかりません。汚染物質は生物の命を奪います。ニワトリの中で、たった一羽生き残ったのが怪鳥コケコッコーンでした。汚染物質を食べて、あのカメだけが生き残ったのか、それとも他のカメも生き残っているのか、また、他の生物も巨大化しているのか、あの青い海の、深い

暗い闇の中で何が隠されているのかは、私にはわかりません」

避難民が大騒ぎの中、校長と町長は、目の前の巨大生物の遥か彼方に広がる青い海をじっと見つめていた。

ここで、巨大なカメのことを、カメが大であることから、「カメダイ」と名付けることにする。カメダイは後ろ足で立ち上がっていた。やや猫背ならぬ、亀背で丸くなっていた。これは、甲羅のせいだ。当り前か。バナナマンも直立しているが、体は、ブーメランのように、ややゆるい曲線を描いている。これも当り前か。

そう言えば、スーパーでは、まっすぐのバナナが販売されているのは見たことがない。きゅうりは、まっすぐになるように、人が手を加えているが、バナナもまっすぐになることはあるのか。現在、バナナマンとカメダイとの戦いの真っ最中なので、この件に関する思索はしばらくおいておこう。

さて、対峙するバナナマンとカメダイ。共に、渚に佇んでいる。足首が海に浸かるぐらいだ。もちろん、二人？ともが巨大だからであり、人間の身長であれば、足が届かなく、体全身は沈んでしまう深さである。その証拠に、カメダイによって引き起こされた津波で町に押し流されたはずの漁船が、戻り波の力で、周囲に浮かんでいる。

海側に、カメダイ。陸地側に、バナナマン。両者は、足を持ち上げることなく、足を滑らせながら走る。足首が海に浸かっているため、少しでも抵抗を減らすためだ。互いに自分にとっての攻撃の間合いをはかっている。

突然、カメダイからバナナマンの顔面に向かって、左ストレートパンチが飛んできた。かわすバナナマン。続けざまに右フックだ。お腹かをへこませ（いや、もともとバナナマンのお腹はへこんでいる）かわすバナナマン。カメダイにはボクシングの心得があるのか。

だが、バナナマンも負けてはいない。バナナのように舞いながら（どんな舞いや！）カメダイのパンチを避ける。いくらカメダイにボクシングの心得があっても、ガニ股で、かつ、ややカメ背で、かつ、背中に大きな甲羅を背負っているため、亀のような舞いはできても、バナナのような舞いはできない。（当り前だ！）いらだつカメダイ。

何かわからないけれど、カメ語で叫んでいる。翻訳すると、「おい、バナナマン。後、一分もたたないうちに、お前を海の藻くずにしてやる」とのことだ。カメダイは、少しほら吹きで、短気な性格みたいだ。体ごと突進してくるカメダイ。バナナマンはすぐさまスーツを脱いだ。以前、怪鳥コケコッコーマンとの戦いで使った必殺戦法だ。柳の下のどじょうならぬ、海のカメを掬えるのか。

スーツに足を取られて、そのまま倒れるカメダイ。いわゆる腹ボテだ。高台からこの様子を見ていた小学校の体育教師が生徒に向かって言う。

「あんな飛び込み方は駄目だ。お腹から落ちて、痛くてたまらんぞ。カメのくせに、飛び込み方も知らないんだな。いいか、みんな、プールや海に飛びこむ際には、両手を耳の横に揃え、指の先から入水するんだぞ」「はい」生徒全員が声を揃える。いつ、いかなる時でも、教育のネタはある。カメも腹ボテをする。カメの腹ボテを見て、自分の飛び込み方を直せ、だ。やはり、現場の教育は重要だ。

だが、心配しなくても、カメダイの腹は甲羅ほどではないけれど、堅い。少々の腹ボテで痛みなんか感じない。すくっと立ち上がるカメダイ。カメダイは、パンチ攻撃ではらちがあかないと思ったのか、突然、背中から刀を取り出した。いつのまに隠し持っていたのか。カメの甲羅に隙間でもあるのか。それとも、カメダイはマジシャンなのか。刀はカメダイの背もあるほどの刀だ。これを作るのに、人間の刀鍛冶師なら何人必要だろう。きっと、ギネスものだろう。

カメダイが刀を振り下ろす。ビューン。間一髪で刀の先をかわすバナナマン。刀を使うなんて卑怯なカメダイ。子どもたちが「卑怯だ。卑怯だ。カメダイ卑怯だ。刀なんか使うのは卑怯だ。素手で戦え」と、一斉に叫び出す。

この声が聞えたのか、カメダイが避難所に向かって、右手のひと差し指を立て、「ウォー」とひと声上げた。カメ語を翻訳すると、「戦いに卑怯もクソもあるか。お前たち人間だって、自分たちが処理できない化学物質等を勝手に海に流しやがって。この責任はどうとるんだ」

この言葉には堪えた。町長も校長も体育教師も、町の大人たちは全員黙ってしまった。子どもたちには意味がわからなかったが、大人たちが全員黙ってしまったので、人間にとって不利なことを言われたのだと感じた。

とにかく、このままではバナナマンにとっても不利だ。

「バナナマン！この木を使え」

声の主は、町長と校長。先ほどまで、カメダイの心からの叫びに言葉を失くし、俯いていたが、今は、バナナマンが危機の状況にある。反省は終わった。これからは前を向いて歩いていくんだ。立ち直りが早いのが、人間の特徴だ。顔を上げ、やはり悪いのはお前だと、カメダイをにらみ返す。

町長が叫んだ「この木」とは、避難所の裏山に生えている巨木だ。この木は、この町の守り神である神社の神木だった。今こそ、町の最大の危機だ。躊躇している間はない。バナナマンは、町長と校長に一礼すると、巨木を引き抜き、正眼に構える。巨木が抜かれた後は、広い窪地ができた。避難所に入れなかった人々が身を隠した。やはり、この巨木は町の守り神だ。抜かれてさえも、町の人々を助ける。

カメダイの刀はよく見ると、鉄ではなく、カメの甲羅からできていた。カメダイは、その刀を上段に構えている。反対に、バナナマンは神木を正眼から下段に構え直した。神木の先は海に浸かっている。互いに、敵の隙を窺う。勝負は一瞬でケリがつきそうだ。互いに身じろぎもしない。実際には数分にも関わらず、両者にとっても、また、町の人々にとっても数時間、いや永遠の時間が過ぎたように思われた。

「ウォー」（カメ語を翻訳すると「バナナマン、お前の負けだ」）

先に動いたのはカメダイだった。万年生きる亀も、わずか数分の緊張感に耐えきれなかったのだ。等身大の刀が上から下に振り下ろされる。バナナマンもすかさず神木を下から上に振り上げる。カメダイの刃がバナナマンの安全スーツに触れる。上から下に切り裂かれるスーツ。だが、肉体までには届かない。反対に、バナナマンが振り上げた神木がカメダイの顎を捉えた。ほんのわずかだがカメダイの刃よりもバナナマンの神木が長かったのだ。神木の先が海に浸かっていたため、カメダイには神木の長さがわからなかったのだ。

顎が砕け、顔から目が飛び出したカメダイ。再び「ウォー」と断末魔の叫び声を上げ、甲羅から倒れた。円状に巨大な水しぶきが立ち上った。まるで水上の仕掛け花火のようだった。

カメダイの断末魔のカメ語を翻訳するところだ。「残念だが、これが俺の最後だ。だが、俺には弟が二人いる」なんと、カメダイは三兄弟だったのだ。「だが、心配するな。弟たちに言うてある。こんな空しい争いはやめろと。どちらが勝っても憎しみが残るだけだ。仇打ちはやめろとな。人間どもよ。俺は、海に住む全て生物の人間に対する怒りの塊で巨大化したのだ。俺の死を契機に、早く、海を浄化してくれ」

バナナマンは、切られたスーツのチャックを閉めると、カメダイの死体を抱え、「バナッチ」の掛け声とともに、宇宙へと飛んで行った。まさか、バナナマンはカメダイの死体を宇宙に不法投棄するのか。それは、やめろ、バナナマン。今度は、宇宙人が攻めてくるぞ。だが、猛烈なスピードのバナナマンの背中には、注意の声は届かなかった。

カメダイの言葉は、町長を始め、校長など町の人々の心を打った。カメダイが倒れた際に剥がれた甲羅の一部が港に流れついた。その甲羅のかけらは、カメダイが町を破壊したにも関わらず、反対に、神社の守り本尊として奉納され、いつまでも町を守ってくれるよう、祈りを捧げるのであった。だが、海を浄化するという課題はこれから解決していかなければならない。

その夜、避難所から家に帰った町の人々は、安心して夕食に着いた。大津波のおかげで、街中の道路や家などに魚が打ち上げられたのだった。手づかみで魚を捕まえることができた。ピチピチ跳ねて勢いがよかった。人々は、早速、煮物、焼き物、刺身と様々な料理で魚をたらふく食べ、海の恵みに感謝した。

「お腹いっぱいだ」

大人たちが大漁に浮かれて大騒ぎをしているのを横目で見ながら、小学生の子どもが空を見上げた。真っ暗な空には、亀の形をした星が燦然と輝いていた。

「さあ、テレビを消しなさいよ。ご飯ですよ」

僕は、ソファーに寝転がったまま、「はあい」と返事をした。

「あれ、パパは？」テーブルの上には、ママと僕の分しか夕食がなかった。

「パパは、飲み会ですって」「やっほー」「パパと一緒に食事をしないことがうれしいの？」「違うよ。パパが飲み会の日には、必ず、お土産があるからだよ。今晚は何かな」「そう、いつも、いつもはありませんよ」「そうかな」

僕は椅子に座り、「いただきます」の合図とともに、ご飯、ハンバーグ、レタス、キュウリ、トマト、マカロニスパゲティ、卵スープを全て平らげた。そして、テレビを見たせいではないけれど、体の中に、ご飯神社、ハンバーグ神社、レタス神社、キュウリ神社、トマト神社、マカロニスパゲティ神社、卵スープ神社をお祭りした。僕は、全ての食べ物から守られていることを確信した。

その後、お風呂に入り、少し勉強をした。全て、神社からのエネルギーのおかげだ。十時過ぎだ。僕がもうそろそろ寝ようかと思ったら、玄関から「ただいま。ヒック」の音がした。僕は急いで階段を下りた。そこには、笑い声を上げ、元気があるように見えるけれど、足がふらつい

ているパパの姿があった。パパの右手にはタコ焼きの袋がぶら下がっていた。こうして、僕のお腹の中に、タコ焼き神社を追加することになった。

第三モン話 エコ怪物ゴミモン現る

ここは町のゴミ焼却場。毎日、家庭や会社などから、生ごみや紙袋など、燃やせられるゴミが収集車で運ばれてくる。車は、工場のスロープを登り、パッカーを開け、焼却炉にゴミを落とし込む。圧縮されたゴミたちが、雪崩を打ったように、それとも解放された喜びからなのか、勢いよく落ちて行く。また、次の収集車がやってきた。

作業員たちは、車が混雑しないよう、手順よく、整列するよう指示していく。次々とやってきては、ゴミを落とし、再び、ゴミの収集に向かう収集車。このゴミは、この町で住んでいる人だけのものではない。近隣の大都市からも運ばれてくる。収集車は、朝一番にゴミを収集する。そして、パッカーがいっぱいになれば、焼却場に運んでくる。

朝の第一陣が終わった。焼却場の現場作業員たちが一息つく。次の出番は、投げ込まれたゴミを空いている場所に移動させるクレーン担当の仕事だ。その時だ。「うおおお」という、叫び声とも、機械音ともわからない大きな声が出たかと思うと、ゴミの山が焼却炉からせり上がって来た。クレーンがゴミを押さえようとするが、クレーンを跳ね飛ばす。作業員たちは慌てる。深い焼却炉に何かが立ち上がった。そして、焼却場の屋根を吹き飛ばした。

「みんな、逃げろ」警報が鳴り響く。焼却場の屋根から突き出たのは、ゴミの塊りだった。体中に生ごみが詰められたビニール袋がひっついていて、そのビニール袋が寄せ集まり、人間の形をしていた。

「モンスターだ。逃げろ、逃げろ」

従業員たちは焼却場から飛び出る。ゴミを運び込もうとしていた収集車は、急ブレーキを掛け止まると、方向転換して、慌てて来た道に戻ろうとする。ゴミの塊のモンスター、ちじめて、ゴミモンは、自分の体のゴミをむしりとると、車に投げつけた。ゴミは見事に的中。車は横倒しになり、運転席から、作業員がほうほうの体で逃げ出る。

ゴミモンが大きく息を吸うと、パッカー車ごと、ゴミモンの体にひっついた。周辺にあるゴミが次々と、ゴミ磁石の力で、ゴミモンの体に吸い寄せられていく。山中の、人が見えないところに捨てられた、引っ越しの際に捨てられたふとんや雑誌や服など、道路のグリーンベルト地帯に捨てられたタバコの吸い殻や空き缶、橋脚にからまりついた納屋の破片などが、空中を乱舞しながら、ゴミモンの体に吸い寄せられていく。

その光景を見ていた人々は「もうこれで、年一回の大掃除が必要になくなった」と手を叩いて喜ぶ一方、ゴミを体に付け、さらに巨大化していくゴミモンに恐れをなした。ゴミモンは、周辺のゴミを全て体に吸いつかせると、一步、一步、歩きだす。その度ごとに、ゴミが、車が、家が、ゴミモンの足元に、膝に、お尻に、腹に、胸に、顔に引つつく。家を捨て、車を捨て、家財道具を捨て、中には、家族まで捨て、逃げ惑う人々。

「ゴゴゴゴゴゴ」ゴミモンの唸り声なのか、叫び声なのか、呟き声なのか、笑い声なのか、体中のゴミが擦れる音なのか、わからない音がする。多分、何かをしゃべっているのだ。

ここで、ゴミモン語を翻訳してみよう。「俺の体は、お前たち人間が生み出したゴミでできている。どうせ、お前たち人間が、今、使っている物は、いずれは、ゴミとして捨てられる運命に

ある。それならば、早いうちにゴミとして俺の物にしてしまおう方がいい。そうすれば、不法投棄をされる恐れがない。それに、所詮、お前たち人間も、俺からすれば、ゴミだ」

恐るべき思想の持ち主のゴミモン。今は、家や車、家財道具などを、ゴミとして吸収しているが、そのうちに、人間もゴミとして吸収しそうな勢いだ。このままでは、人間が、この町が、この国が、この地球が危ない。

そこに、太陽系防衛隊（カメダイとの戦いの教訓から、組織が強化され、太陽系を守る組織となった）ジェット機が現れた。

「このまま、ゴミモンの好きなようにさせないぞ」

ジェット機からミサイルが発射される。ミサイルは、ゴミモンの体に命中した。爆発するミサイル。体中が燃え上るゴミモン。だが、ゴミモンの顔に苦痛の色はない。いや、笑みさえ浮かべ、余裕の表情だ。ゴミモンはミサイルさえも、ゴミとして体に吸収してしまったのだ。

「フッ」ゴミモンの口から火の玉が飛び出した。かわす太陽系防衛隊のジェット機。だが、次々と、火の玉が飛んでくる。火の玉は、ゴミモンの体の一部だ。有限のようで、無限のゴミ資源。いくらでも、火の玉が連続発射できるのだ。一発ならばかわすこともできるが、火の玉の連続攻撃に、さすがの太陽系防衛隊の最新式ジェット機も、ゴミモンに近づいて攻撃するどころか、逃げるので精一杯の有様だ。ついに、火の玉のひとつが、ジェット機の羽根に当たった。

「しまった」隊員が叫んだ。ジェット機から炎が噴き出し、きりもみ状態で落下し始めた。隊員の運命はいかに。コックピットから、脱出だ。隊員が飛び出し、パラシュートが開いた。よかった。隊員の命は無事だ。これで、安心か。いや、違う。今度は、パラシュート目がけて、火の玉が飛んでくる。もうだめだ。地上の人々が手のひらで顔を覆う。だが、指と指の間から、最後の瞬間を見ようとする人もいる。

「バナッチ」大声が上がり、閃光が走った。何かが飛んできて、パラシュートに当たろうとした火の玉を吹き飛ばした。そこには、バナナマンが立っていた。バナナマンは、太陽系防衛隊員を手のひらで救うと、そっと、地上に降ろした。

「ありがとう。バナナマン」隊員が礼を言う。頷くバナナマン。

だが、そんな余裕はない。今、まさに、町は、ゴミモンのゴミ磁力で、全ての物質が、地上から根こそぎ吸い取られようとしていた。例えば、家なら、土台から上が全てなくなり、基礎のコンクリート部分だけが、家があったという証拠を示すために残った。全てが、海に押し流され、いや、訂正だ、空に舞い上がってしまいつつある。

「何とかしてくれ、バナナマン」都合のいい人々の祈りや気持ちが届いたのか、今、バナナマンが登場した。「ゆけ、ゆけ、ゆけ、バナナマン。ゴミモンなんかやっつけてしまえ。ついでに、ゴミも処分してくれ」地上の人々は、声援だけ威勢がいい。

突然、現れたバナナマンに対し、ゴミモンは怒り狂う。今まで、テレビの真ん中に映っていたのに、バナナマンが登場したため、端に寄せられたからだ。右側がバナナマン、左側がゴミモン。こういう場合、得てして、右側が正義の味方、左側が悪役の配置になる。

「なぜ、なぜなんだ。人間どもの無駄な、無意味な消費生活を指摘し、悔い改めるよう広報・啓発活動をしている俺が、悪役にならなければならないんだ」きっと、ゴミモンはこう思っている

に違いない。

ゴミモンの口から、炎のつぶてが飛んできた。避けるバナナマン。だが、先ほど、太陽系防衛隊のジェット機を破壊したように、炎のつぶては連続で飛んでくる。避けようにも避けきれない。いくつかのつぶてがバナナマンの体に命中する。あぶない、バナナマン。危険が危ないぞ。怪我が傷になるぞ。

だが、視聴者の皆さん、安心したまえ。バナナマンは、全てを跳ね返すバナナスーツを身につけているのだ。このスーツは、含有水分率は三十パーセントで、炎が当たっても、燃え上ることはなく、跳ね返すのみ。地団太を踏むゴミモン。だが、この地団太が曲者だ。悔しがっている振りをすることで、カメラマンの気を引き、顔をアップにしてもらおうと考えているのだ。卑怯だぞ、ゴミモン。

一般視聴者の声が聞えたのか、ゴミモンのアップから、二体の戦いの画面に変わる。ゴミモンの続いての攻撃は、ゴミのつぶて攻撃だ。自らの体の、特に、中年のせいか、わき腹に最大級についたゴミの肉をちぎっては投げ、ちぎっては投げてきた。なんと、こんな、ダイエット方法があるとは思わなかった。

バナナマンとゴミモンの息詰まる戦いに魅入っていた人々のうち、我こそは中年太りだと思う、男女約千人余りが、ゴミモンの戦法を見て、自らのウェスト部分を掴みだした。残念ながら、人間は、自分の肉を掴むことはできても、肉をちぎり取ることはできない。せめて、赤い跡ができるくらい肉を揉むことで、エネルギーを消費させ、やせるしかない。ゴミモンに言わせれば、この余分な肉こそが、ゴミのそのものなのだと言いたそうである。

ゴミモンのわき腹の贅肉が、バナナマンに向かって投げつけられる。だが、心配するな。バナナスーツは、炎さえも恐れぬ。ゴミなんかなんのそのだ。だが、そのゴミの一部が付着した。なんだ、こんなもの。バナナマンは、ポケットからハンカチを取り出し、拭き去ったが黒い染みがのこる。何度も、何度も、ハンカチをこする。

ここで言うておくと、バナナマンは、特に、潔癖症でもなく、精神的に病んでいるということもない。一日に、何十回ともなく手を洗う人と一緒にしないでくれ。彼は正常なんだ。そんなバナナマンが何度も染みをとろうとするが、のこる。反対に、染みがどんどんと広がってくるではないか。

「ゴゴゴゴゴゴゴ」ゴミモンが高らかに笑う。翻訳するとこうだ。「いくら、こすってもそのシミはのこる。それどころか、体全身に広がって、おまえも、俺と同じ、ゴミモンになるんだ」

そう、言い終わると、ゴミモンは、辺り一面に染みを巻き散らし始めた。「きゃあ」逃げ惑う人間や犬や猫や牛やカラスやハトや生き物たち。契約も交わしてないのに、ゴミモンの仲間になれるのはかなわないからだ。ゴミモンは、種をまく人のように、自分のわき腹を掴んでは、周囲に巻き散らす。確実に、ゴミモンの種がまかされている。

バナナマンの全身の半分が黒く覆われてしまった。バナナマンの意識の半分も、ゴミモンの考え方に侵され始めていた。そう、このシミは、体だけでなく、脳さえも、ゴミモン化させるのだ。恐るべし、ゴミモンパワー。このままでは危ないバナナマン。バナナマンはゴミモンを倒そう

と思うのだが、これまでの人間が行ってきたゴミ対策に対するゴミモンの不満も一理あると考え出した。そう、脳がゴミモン化してきたのだ。

このままではいけない。太陽系防衛隊の一員が叫ぶ。

「頑張れ、バナナマン」この声に合わせて、人々も叫ぶ。「頑張れ、バナナマン」

さて、この頑張れと言う言葉だが、一見、応援している言葉に思えるが、頑張っているのに、いや、もう頑張りが効かない人が耳にすると、座り込んで動けないのに鞭で叩かれているかのように、また、傷口に塩を塗りこめられているかのような気がする。皆さんも、相手や状況に応じて、使い方に気をつけよう。

バナナマンは、意を決し、バナナスーツを脱ぎ捨てた。このままでは、体も心も、ゴミモンに同化してしまうからだ。「バナッチ」主役がいなくなったために、崩れ落ちるバナナスーツ。もう、全体が真っ黒で、黄色の面影がない。そのまま、地面と同化し、堆肥になったのだ。バナナスーツの土からは、緑の芽が吹きだした。自然は偉大だ。

ゴミモンと対峙するバナナマン。へたに敵に近づくと、ゴミにされてしまう。かといって、離れたままでは、敵を倒せない。見ているだけでは、町全体がゴミ化していくの止められない。どうする、バナナマン。この町を、この国を、この地球を守れるのか。

バナナマンがゴミモンに突進した。ゴミモンが手を広げた。このまま抱きかかえて、バナナマンをゴミ化する気だ。それでも、バナナマンは、ゴミモンを抱きかかえる。ゴミモンのゴミ液がバナナマンの体全体を覆う。見る見るうちに、バナナマンの体が黒く変色していく。大丈夫なのか、バナナマン。バナナマンは、しっかりとゴミモンを抱きかかえると、空に飛び上がった。どこへ行くんだバナナマン。

バナナマンの向かった先は、地球の最後の秘境の地、南極だった。バナナマンはゴミモンとともに、南極大陸に降り立つ。

「ゴゴゴゴゴ」翻訳しよう。

「なんて、ここは寒いんだ。体が動かない。凍ってしまいそうだ」

体をちじこませるゴミモン。寒さの我慢大会だ。冷凍バナナの体験もあるバナナマン。寒さには自信がある。一方、ゴミモンは燃やされることには慣れており、熱さには強いが、寒さにはからっきし駄目だ。うなだれ、身動きができなくなり、そのまま凍ってしまった。

バナナマンは、凍りついたゴミモンにバナナチョップとバナナキックをお見舞いすると、ゴミモンは砕け散ってしまった。バナナマンはおもむろに、携帯電話を取り出すと、その様子を写真に撮影し、太陽系警備隊（町も、国も、人も満足に守れないのに、何故、太陽系警備隊なのか？）の隊員に写メールで送る。二人は写メ友だったのだ。

「バナナマンがゴミモンを倒したぞ」

「これから平和と安全な日々が送れるぞ」

町中の人は大喜び。だが、極地でバラバラになったゴミモンの後片付けのことは誰も考えていない。いくらバナナマンが寒さに強くても、これ以上、この極地にいると、体中の水分が凍りついてしまう。それこそ、強大なバナナアイスキャンデーになってしまう。そうなれば、これから各地で開催される夏祭りの縁日では、客寄せパンダならに、客寄せ冷凍バナナマンとして有名に

なれるだろうが、心おしとやかで、照れ屋で、やや引き籠りぎみのバナナマンには考えられない行動だ。

「バナッチ」の声とともに、バナナマンは南極を後にした。

後に残ったゴミモンの残骸。そこに、どこからか一匹の犬がやってきて、匂いを嗅ぐと、唾液で氷を溶かしながら、ゴミモンの残骸を食べ始めた。この犬は、探検隊に見捨てられたのか。腹が減っていたのだろう。誠に、可哀そうな犬だ。だが、犬の体に、黒い斑点がひとつ浮かび上がったのを誰も知らない。また、来週。

「知っているよ。きっと、ゴミモンが復活するんだ」

僕は、思わず、声を上げてしまった。それくらい、テレビに夢中で、感情移入していた証拠だ

。

ママが驚いて、僕を見る。

「さあ、テレビ消して。夕食にしますよ」

「パパは？」

「今日は遅くなるって」

「飲み会？」

「仕事よ」

「そう」

二人だけの食事。僕は、感化されやすいのか、ごはんは茶碗についている一粒も残さず、焼き魚は骨までしゃぶって、キャベツは細い芯まで、残らず食べた。少しでもゴミが残らないように。ゴミモンが復活しないように。

「まあ、今日はどうしたの？こんなにきれいに食べるなんて。テレビを見るのも、たまには、いいことがあるのね」

ママが感心している。でも、明日の朝になれば、うんこやおしっことなって、僕の体からゴミが出るのだけれど。

怪物ゴミモンとの戦いが終わり、町は復興に向かう。ゴミが全て流され、よかった反面、ゴミでないものも、ゴミモンに吸収されたので、全ての財産を失ってしまった人もいる。何かを得ることは、何かを失うことなのだ。それでも、町の人々は、生きるため、生きて行くため、行動し始めた。

だが、全ての人がそう言う訳ではない。家を失い、家族を失い、財産を失い、工場を失い、仕事を失った者の中には、生きる気力も失った者もいた。これからの先が見えないからだ。

見えない以上、今、生きている意味がない。もちろん、生きることに意味は必要ない。意味がなくても生きていける。だが、前を向くためには、ちょっとしたスパイスも必要なのだ。茫然自失した者は、働くことをせず、家の中に引きこもり、アルコールに溺れる者もいた。近所の人が、いくら声を掛けても出てこなかった。

例え、玄関口に出てきても、ろれつが回らず、会話ができず、怒鳴り散らすしかなかった。もちろん、彼らは彼らなりの言葉で、世界を表現していたのだ。ある意味で詩人であり、正常な者から見れば、死んだも同様な人、つまり死人でもあった。だから、近所の人々は、助けることをあきらめ、無視するようになった。

そういう詩人も、夜になると、人眼を忍んでか、家の外に出た。ふらふらとコケコッコッコ歩きか、亀のようにのろのろか、果てまた、近所に自分のゴミを蒔いて歩いた。寂しさの裏返しであり、生きていること証明する行動であった、当然、近所の人からはクレームが来た。町の役場の職員や警察官、保健師などが、家を訪問するが、そうした人々の行動は変わらなかった。

ある男は、瓶ビールをラッパ呑みしながら、空になった瓶を両手で回し、時には、げっぷが出る瞬間をねらって、ライターを口元で点火し、火炎放射ごっこをして楽しんだ。ちょっとした、サーカスだ。もちろん、同じ物事でも、よいと思う人もいれば、悪いと思う人もいる。詩人であり、アル中な、乱暴者たちには、好評であったが、平和を守る、正義な人たちにとっては、眉を潜め、この狼藉は許しがたいものであった。

普通の人々とアル中の人々は、同じ町の人々であったにも関わらず、二つのグループの間で小競り合いが始まった。当初は、圧倒的に、普通の人が多かったが、アル中で、乱暴者たちでも、生きていけることを知ると、少しずつだが、アル中の仲間が増えていった。アルコールは、水のように、低い所に流れるからだ。家の雨どいから、小さな用水路から、小川に、そして、海に流れるように、アル中の、乱暴者たちが増えて行った。このままでは、町が崩壊してしまう。

これまでは、怪物が人間の敵であったが、今回は違う。人間同士が、敵となり、争いを始めたのだ。もちろん、敵同士だから、相手のことを、自分と同じ人間とは思っていない。怪物や異星人、化け物などと認識している。怪物ならば、1匹、一頭、一羽、一物を倒せば解決したが、人間は、数が多い。また、血縁や地縁関係などがあるため、敵への憎しみが、DNAとして、先祖から、現代へ、そして、後裔へと、無限に続くのである。憎悪が憎悪を呼び、憎しみの連鎖が、人々の体を縛り上げ、敵を倒すこと以外に、道はない、幸せは来ないと考えを固定してしまうのだ。

これまでにない、人類の、そう、一人の人間を越えて、人間と言う種類の危機が、今、まさに、この町で起きようとしている。この町で起きていることは、必ずや、隣町にも飛び火し、この国全体、いや全世界に広がるであろう。これは、作者の予言である。予言はできるだけ、荒唐無稽がよく、かつ、悲劇の方がよい。

人間は、今、自分が幸せであることを忘れていたが、不幸になることには敏感であるため、未来に悲劇が待っているとすれば、悲劇の予言に惑わされて、一直線に、奈落の底の海へと沈む行進を始めるだろう。

この予言に、真っ向から立ち向かうのが、我らがヒーロー、バナナマンだ。だが、今回の事件は、さすがのバナナマンも思案しかねていた。なぜなら、どちらの味方についても、一方から非難され、根本的な解決にならないからだ。当然、アル中な、乱暴者たちを許すことはできないが、いくら倒したところで、いくらでも、アル中者は増えて行くだけだ。最終的には、アル中者全員を、消す、つまり殺戮することだ。

健全な者たちは、それを推奨したものの、誰がやるかについては、口を閉ざした。みんな、誰かがやってくれるのを期待し、誰かがやれば、非人道的行為だと非難することを待ちかねている。

こうした中、アル中な、乱暴者たちが増えていき、健全な者たちは、住処を追われていく。最初は、健全な者たちとアル中な、乱暴者たちの、二つの勢力の争いであったが、アル中な、乱暴者が多勢になると、今度は、アル中者同士での争いが始まった。元々、自分勝手な、アル中どもである。まとまって、一緒に、「アル中な、乱暴者の町にしていこう」なんて、キャッチフレーズで、ひとつにまとまる訳がない。たまたま、自分たちが迫害を受けていたから、互いの傷を舐め合っていただけにすぎないのだ。

こうなるともう大変。町は、二分どころか、三分、四分、五分と、再現なく、派閥が発生し、互いに憎しみ合い、ののしり合い、つかみあい、夜打ち、朝駆けする始末だ。これは、アル中な、乱暴者たちの間だけではなく、健全な者たちにおいても、発生した。町は騒乱状態だ。

バナナマンは、じっと座り込んでいた。人間同士が敵のように、罵倒し合い、掴み合い、果ては、殺戮になる状態を黙って見ていた。時には、人間に変身し、健全者のグループに入り込み、彼らの真意を図ろうとした、時には、アル中軍団に忍び込み、彼らの本音を探ろうとした。だが、調査すればするほど、これまでのように、単に、怪物を倒せば物事が解決する、という単純な内容ではないことがわかった。

バナナマンは、あらゆる書物を読み、あらゆる人に尋ね、あらゆることを考えてみた。だが、答えはでなかった。頬に右手を添え、答えを求めて、町を逍遥した。その間にも、健全軍団とアル中軍団、隣人同士の争い、家族の中で争いは絶えなかった。互いに、互いの消滅しか、平和はこないと信じていた。

バナナマンは途方に暮れ、空を見上げた。見上げながら歩いているうちに、石につまずき、転んだ。「バナッチ」思わず大声を上げるバナナマン。その声に、今、まさに、殴り合いを始めようとしていた二人組が、バナナマンを見て、笑った。「バナッチ」照れて、頭を掻くバナナマン。その時だ。バナナマンの頭にある考えが浮かんだ。頭を掻いたことで、脳に刺激が与えられたからだ。

バナナマンは、自分の故郷であるバナナ王国に連絡をとり、至急、ババナの皮を送ってもらうよう依頼した。

「バナナの皮だって？中身じゃないのか」

「いえ、皮だけでいいんです」

「そんなものどうするんだ」

「人類の平和のために使うんです」

「人類の平和？人類は、バナナの皮を神として敬う気なのか」

「まあ、それに似たようなものです」

「皮はいいとして、中身はどうしたらいいんだ」

「バナナの缶詰にして、保存食として販売してください」

「そりゃ、いい考えだ」

こうしてバナナ王国では、早速、国中の人を総動員して、バナナ農園からバナナを採取し、バナナの皮を地球にいるバナナマンの元に送るとともに、バナナの中身を缶詰にして、宇宙各国に販売した。

宇宙に住む人々は、これまで生のバナナを食べたことがなかった。バナナは美味しいのだけれど、一度に食べきれずに、黒く変色してしまい、腐らすことも多かった。バナナに缶詰があればなあ、と口には出て来ない期待が、星雲のように渦巻いていた。その矢先に、バナナの缶詰の販売である。宇宙の人々は、我先に、バナナの缶詰を購入した。おかげで、バナナ王国は豊かになり、地球に派遣しているバナナマン以外にも、全宇宙に、愛と哀しみのバナナマン兄弟を派遣できるようになった。めでたし、めでたし。いや、話しは終わっていない。

バナナマンの元に、故郷のバナナ王国から、ババナ宅急便が届いた。中身は、バナナの皮ばかりだ。バナナマンは、考え過ぎたので、お腹が空いていた。一本ぐらい、バナナの中身があってもいいように思えたが、それはなかった。バナナマンは、しまったと思った。何でも厳格に定義すると、後で困ることになる。だが、バナナの皮を送ってもらったことには感謝していた。やはり、持つべきものは故郷だ。

バナナマンは、早速、道路にバナナの皮を蒔きはじめた。それを知らない人が、足を置くと、すべって転んだ。わっと、歓声が上がり、笑い声に包まれた。今、まさに右の拳を振り上げようとした人々も、左の拳も振り上げ、両手をグーからパーに開き、拍手に変えた。最初は、転んだ人を笑っていたが、中には、わざとバナナの皮に足を乗せ、転ぶ人々も出てきた。意識的に、笑いをとろうとしたのだ。何と、サービス精神の旺盛なことだ。子どもたちは、バナナの皮スーツに体を乗せ、道路を滑った。バナナサーフィンだ。歓声が上がる。

こうして、健全軍団とアル中軍団は、まずは、笑うことから始め、笑うと喧嘩することが馬鹿馬鹿しくなるので、争いは次第に少なくなった。バナナマンは、今日も、町中で、笑いの皮を蒔き続けている。バナナの皮が、町をすべったのではなく、町を救ったのである。

「フーン。今日は戦いがなかったんだ」

僕は、テレビを消した。

「ママ。バナナ買っている？」

「バナナ？バナナならテーブルの上にあるわよ。急にどうしたの。パパは毎朝、食べているけど、あなたは、食べないじゃない」

「中身じゃなくて、皮が欲しいんだ」

「皮？」

「皮が地球を救うんだ」

「何か、バナナの皮から特効薬でも発見されたの？」

「ママは、現実的だなあ。薬は薬でも、笑いの薬なんだ」

「あっ、そう。ちょっと、洗濯物片付けに行ってくる」

ママは、二階に上がっていった。僕は、テーブルの上のバナナを手にとると、皮を一枚剥いた。その一枚を床の上に置いて、足を乗せた。そのままで滑ることはなかった。前方に力を入れてみた。おっと。僕の体はバランスを崩した。こけるほどではなかったけれど、世界平和のために、わざと転んだ。お尻を強く打った。

お尻の痛みと同時に顔から笑いが出た。世界平和は、難しいと思った。

「バナッチ」

番組が開始するやいなや、バナナマンが登場した。バナナマンは、自分の周りにパンチやキックをする。バナナチップを四方八方に飛ばす。だが、周囲には、怪物はいない。客観的に見れば、バナナマンが、朝のラジオ体操をしているのか、精神に錯乱を侵しているのか、どちらかに見える。

だが、これはテレビだ。バナナマン体操の時間でも、バナナマンのドキュメンタリーでもない。バナナマンが、何ならかの敵と戦っているのだ。だが、敵は見えない。そうか、バナナマンは見えない敵と戦っているのだ。それなら話しはわかる。

見えない敵、それは何だ。そして、見えない敵に勝つことができるのか。

場面が転換する。町は賑わいを取り戻しつつある。これまで何度となく、怪獣や自分たち同士の争いで、破壊や惨劇が繰り返されてきたが、町の人々の復興意思は強かった。「何で、うちの町だけ、不幸が続くんや」という人々の不満があったが、これはテレビドラマだから仕方がない。文句を言うのなら、ナレーション担当の私に言うのではなく、脚本家や監督に言って欲しい。とにかく、町は元気を取り戻しつつあった。それなのに、再び、事件が起こった。神は、万人に平等に幸福と不幸を与えるのではなく、不均一な扱いをすることにより、町の人々の信仰の深さを試そうとしているのか。

事件とはこうである。町の人々が、急に、「ごっほ、ごっほ」と咳き込み始めた。最初は、風邪だと思って、二、三日寝ていたが、いっこうに咳は止まらない。うがいをしたり、喉あめを口に含んだりしてみたが、症状は変わらない。病院で診察を受けるが、医者も首をひねるだけで、原因がわからない。最初は一人だったが、二人、三人、と増え続けた。この病気は感染するのか。そこで、これ以上感染地域を広げないために、集落閉鎖や学校閉鎖、会社閉鎖が行われたものの、とうとう町閉鎖までの状況に陥った。

外部から全く遮断された町。町自体がどうなっているのかもわからない状況だ。人々はただ病に倒れていくだけだ。どうにか外部と連絡がとれた。町の周辺の町や大都市から応援の救急車が派遣される。だが、救急隊員もこの町に足を一步踏み入れた瞬間に、気分が悪くなり、倒れてしまうのだ。何とか、救急車が一台、派遣先の街に戻り、状況を説明した。

助けに行かなければならないのに、助けに行けば自分たちも助けを受けなければならない。どうすべきなのか。このままでは、この町の住民たち全員が死亡してしまう。あらゆる医者が集められたが、病気の原因はわからない。周辺の町は、自分の町に感染が広がるのを恐れて、この町との境界を大きな塀で取り囲んだ。そして、監視塔に大きなベルと鈴を取りつけ、監視員を置き、隣町の人々がこの壁を乗り越えようとする、ベルと鈴を打ち鳴らし、自分の町に避難してくるのを防御した。人々は、これをベルと鈴の壁、略して、ベルリンの壁と呼んだ。完全に孤立した町。この町の人々は大丈夫なのか。

宇宙防衛隊（これまでは、太陽系防衛隊であったが、バナナ王国から救援物資を送ってもらったことから、太陽系だけでなく、宇宙全体にまで防衛の目を向けようと、組織が強化されていた

）ように、の隊員たちも、ヘタにこの町に入れないため、ジェット機で空から救援物資を支給するだけである。

「バナッチ」

空に閃光がきらめいた。バナナマンの登場である。だが、今度の相手は人間の眼には見えない。ひょっとしたら、バナナマンの視覚能力は、人間の数十倍もあり、見えない敵が見えたりするのかもしれない。そうなれば、この事件は簡単に解決できるはずだ。視聴者のみんな、バナナマンの活躍を大いに期待しよう。

あれ？可笑しいぞ。バナナマンが右往左往している。手をパチンパチンと叩いている。敵は蚊なのか。いや、違う。今度は、指をぐるぐる回し始めた。相手の目をかく乱させ、気を失わさせる戦法だ。すると、敵はトンボか。いや、違う。今度は、巨大な虫とり網を持ってきて、振り回している。敵はセミか、チョウチョなのか。

いや、違う。バナナマンは、今度は、巨大な顕微鏡を持ってきた。周辺の土を取って来ては観察している。何か分かるのか。首を振っている。ダメなのか。バナナマンが、様々な手法で、人々の病気の原因を突き止めようとするが、やはり、答えはでない。あきらめるわけではないけれど、あきらめざるをえない。

途方に暮れたバナナマン。一軒の家を訪れる。そこでは、町が封鎖されたために、食糧が行き渡らず、お腹をすかした子どもたちがいた。病気の原因は直せないけれど、空腹を満たすことぐらいなら、できるはずだ。そこで思い付いたのが、バナナ缶詰め。前回の戦いで、バナナの皮を大量に消費したが、バナナの中身は残っているはずだ。

早速、バナナ星に気力電話を掛ける。バナナマン同士、念ずれば、携帯電話を掛けなくても、意思が通じるのだ。もちろん、携帯電話会社と契約する必要はない。バナナマンが、バナナの缶詰を送るよう念ずる。バナッチ。

リリリリリン。バナナ星のコールセンターに、地球にいるバナナマンから気力電話がかかってきた。だが、バナナ星と地球は距離が離れていることと、宇宙砂嵐が発生していることから、バナナマンの意思がはっきりわからない。バ・ナ・ナとまでは聞き取れるが、それ以降の意思がわからない。

「きっと、また、バナナの皮がいるんだろう」

コールセンターの職員は、早速、地球に、再び、バナナの皮を送った。無事、バナナの皮はバナナマンの手元に届いた。箱を開けてびっくり。中身は、中身がなくて皮ばかりだったからだ。

「そんなバナナ。違うぞ、違うぞ」

バナナマンは、再び、気力電話を使う。今度は、意思が確実に伝わるよう、正坐して、両手を合わせ、思念を集中する。

リリリン、リン。リリリン、リン。再び、バナナ星のコールセンターの気力電話が鳴る。

「はい、もしもし、こちらバナナコールセンターですが、あっ、地球のバナナマンさんですか。バナナの皮、届きましたか。いえいえ、お礼なんておよびません。でも、大変だったんですよ。至急、送れと言うから、コールセンターの全職員が徹夜でバナナの皮を剥いたんですよ。今も、少し、眠たいですけどね。いえいえ、そんなことはいいんです。地球の人が困っているんでし

よう。私たちの徹夜なんて、大したことはありません。人助けのためなら、人肌でも、バナナの皮でも脱ぎます、剥きますよ。えっ、皮じゃない。中身が欲しいんですか。そりゃあ、しまった。中身は、皮を剥く時に、ゴミで処分するのはもったいないので、みんなのお腹の中にしまいましたよ。夜中まで起きているときなんか、何もしなくても、お腹がすくでしょう。今回は、まして、バナナの皮を剥く作業がありましたので、余計にお腹が空いたので、パワーを得るために、中身は食べてしまったんです。いやいや、いいんです。聞き間違えたのは、こちらのミスです。早速、バナナの中身を缶詰にして送りますよ。困っている人を助けるためんでしょう。喜んで協力しますよ」

コールセンター嬢は、電話を置くと、電話でのさわやかな対応とは裏腹に「困った。困った。誰か助けてくれませんか」と同僚や上司に相談した。だが、さすがバナナ王国。こんな時のために、バナナの缶詰を貯蔵していたのだ。特急便で、缶詰めを地球に送る。

今、バナナマンの前には、バナナの缶詰が数千個、数万個積み重ねられていた。「やはり、持つべきものは仲間だ」と感慨に耽っていたが、町の住民のグーグーというお腹が鳴る声で、我に返った。

仲間の好意を無にしないためにも、町の全戸にバナナの缶詰めを配り始めた。トントン。ブー。ピンポン。こんにちは。あらゆる手段と方法で、家を訪問した。動けない老人や障害者の人の所にも運んだ。もちろん、バナナマン一人では無理だ。バナナマンが右手で一掴みすると、バナナの缶詰は百個以上。左手で掴むと、同じく百個以上。町の集落の公民館等にそれぞれ置いていく。

「いつまでも家の中に閉じこもってられない」

集落の代表の人々が各家に配っていった。おかげで、人々は、何とか飢えからはしのげた。また、バナナの缶詰を食べると、体力だけでなく気力も沸いてきた。家の中に閉じ籠って孤立していた人々は、外に出るようになった。

「おはようございます」「今日はいい天気ですね」「お疲れさまでした」様々な言葉が掛けられるようになった。外に出られるようになると、不思議な事に咳が止まった。バナナの缶詰のパワーのおかげか、それとも、挨拶やこれまでであった事を話し合うための井戸端会議のおかげで、しゃべることが先で、咳が出る暇がないのか、それ以外の何かなのか。それは誰にもわからない。

バナナマンは戦っていた。自分の周辺に向かって、パンチを繰り出し、キックをかましたり、腹筋を動かしたり、髪（バナナマンに髪の毛があったのか？）を振り回したり、膝を突きだしたり。ひじ打ちをくわしたり、全身全霊を傾けて、見えない敵と戦っていた。

家に引きこもっていた人々は、バナナの缶詰のおかげで、外に出ることが出来た。久しぶりの太陽だった。風が頬を撫でた。もう、咳は出なかった。風とともに、風邪が去ったのか。

バナナマンは汗みどろだった。額にも、顎にも、腋の下にも、背中の腰の辺りにも、足の付け根にも、肘の内側にも、膝の内側にも、汗びっしょりであった。バナナマンが動くたびに、周辺に汗が毀れ落ちた。人は、これを恵みの雨とも、汗くさい産業廃棄物とも呼んだ。

子どもが叫んだ。「僕も一緒にやるよ」

子どもは見よう見まねで、バナナマンの動きを真似、真似た。ラジオ体操のような、ジャズダ

ンスのような、太極拳のような、ベリーダンスのような、盆踊りのような、ヨガのような動きだった。町の人々は、最初は、バナナマンや子どもが踊っているのを見て？こんな非常時に何をしているんだ、もっと他の事をしろと、自分が何もしないことをいいことに非難ばかりしていたが、次第に、動きが面白いのか、リズムに乗せられたのか、笛や太鼓の鳴り物が登場したせいなのか、拍手を始めた。そのうちに、見ているだけではつまらなくなっただのか、踊らにゃそんそん、と、バナナマンを櫓に見立てて、その周囲をぐるりと踊り始めた。

町に活気が戻った。人々に笑いが、元気が戻った。

バナナマンは、ふと、我に返った。自分が一生懸命、見えない敵と戦っているのに、自分の周囲で、町の人々が盆踊りをおどっていたからだ。それも、手を上げたり、足をキックさせたり、地団太踏んだり、これまでバナナマンが見てきた踊りと異なっていた。いや、踊りと言うよりも、何かと格闘しているような動きだった。だが、その動きにはユーモアが感じられた。人間の関節を最大限に活用した動きだった。

きっと、素晴らしい、体操のお兄さんがいて、そのお兄さんの動きに合わせて、みんな踊っているだろう。是非、自分も真似してみたい。いや、今は、町の人々のために戦っているんだ。遊んでいる場合じゃないぞ。いや、待て。なんで、町の人々は、さっきまで家に引きこもっていたのに、今、こうして踊っているんだ。もう、見えない敵はいないのか。

もう町の人々は大丈夫だ。バナナマンは、自分の役割が終わったことを悟った。バナッチの掛け声とともに、バナナマン星へと旅だった。バナナマンがいなくなっても、町の人々は、何かに願いをたくして、一晩中、踊り明かした。

なんか、踊りたくなったぞ。僕は、頭の中の記憶の残像を追いかけ、バナナマン音頭？を踊り始めた。それ、キック。それ、パンチ。それ、地団太踏み。

「何、それ。変な踊りね」

お母さんが、キッチンから首を突き出して笑った。

「バナナマン音頭だよ。きっと、そのうちに、日本中ではやるに違いないよ。だから、僕が一番乗りになるんだ」

「一番になるのはいいけれど、明日、体が動かなくなっても知りませんよ」

翌朝、お母さんの言うとおりの、体が動かなかった。いや、動くけれど、動けば体が痛いから、動けないんだ。そのまま、寝転がっていたら、今度はお腹が鳴り出した。どんな状態でも、人はお腹が空くんだ。僕は、昨晚とは反対に、できるだけ体を動かさないように起き上がり、食卓へ向かった。早速、朝ご飯に、パワーアップのため、バナナを食べたけれど、バナナマン音頭のこととは忘れた。

僕は驚いた。新聞の番組欄には「さらば、バナナマン」と書かれていたからだ。ええ、今日が最終回なの？僕はテレビのスイッチを付けた。テレビでは、画面にバナナマンが映し出されていた。しかも、マイクを持っている。何の事件を発生していないのに、バナナマンが最初から登場するなんて。これは異常だ。いや、バナナマンが最初から登場していることが事件なのだ。僕は画面に釘づけになって魅入った。

好評のうちに放映されてきた「愛と哀しみのバナナマン」ですが、残念ながら、本日が最終回です。打ち切りの理由は、子ども向け番組なのに、理屈が多い、意味深だ、表現が子どもに向いていない、暗い、明るくない、などなどの数多くの意見が放送局に寄せられ、番組の内容は一部の視聴者に好評であったものの、大多数の視聴者からは無視され続けました。

放送局も慈善事業じゃない。視聴率が低ければ、スポンサーが見つからない。スポンサーが見つかなければお金が入らない。お金が入らなければ番組を制作ができない。番組が制作できなければ、放映ができない。もちろん、この番組の公益性、有益性を理解して、無料ででも制作してもいいと監督や俳優たちがいたものの、放送局側は、やはり収益性を重視して、番組を終わらすことにしました。

ほかに、脚本家が、あまりにも「愛と哀しみ」にこだわり、前回以上の内容のある作品を作ろうとしたために、プレッシャーに押しつぶされ、脚本が書けなくなり、作家でありながら、アル中な、乱暴者になったことの原因もあります。

昨日の、新聞の三面の片隅に、「愛と哀しみのバナナマン」の脚本家〇〇 △が、酔っばらって自転車で蛇行運転を繰り返し、警察に逮捕されたと言う記事が掲載されました。本人からは、「仕事に行き詰ってしまいました。今は、悲しみに浸っています。誰か、私に愛をください」と自分のブログにコメントを載せていました。

残念なことです。これからは、朝寝夜起きではなく、早寝早起きのような、規則正しい生活をして、良好な作品を生みだしてもらいたいものです。あなたは、まだ若い、才能も豊富だ。もちろん、このセリフは、あの、アル中で乱暴者な脚本家がしゃべらせているのです。自分自身で、反省することは正しいことです。

話を戻します。とにかく、「愛と哀しみのバナナマン」は、本日の放送を持って、終了いたします。長い間、いえ、ほんの短い間でしたが、番組を視聴していただいた皆さんに、感謝します。私からだけでは不十分なので、これまでの登場人物からも一言、お礼を申し上げたいと思います。さあ、早く。

バナナマンの後ろには、怪鳥コケッコーン、怪亀カメダイ、怪物ゴミモン、アル中な乱暴たち（一人）、見えないけれど見えない敵が並んでいた。バナナマンにやられたはずなのに、何故、今、ここにいるんだろう。僕は不思議な気持ちだった。それだけ、番組に感情移入していたせいだ。

現代っ子の僕は、怪鳥コケッコーンも、怪亀カメダイも、怪物ゴミモンも、全て着ぐるみであることを知っている。着ぐるみの中には、大学生のアルバイトや役者の卵なんかが入っているんだ。まだ、顔は見せられるほど、有名じゃないけれど、怪獣や怪物の演技をすることで、将来は、いつかは、筍の皮を剥くように、化けの皮を剥くように、自分の顔で勝負できるんだ。頑張っほしい。

だけど、僕は、何に感情移入しているんだろう。そして、一人だけ素顔の男がいる。アル中な、乱暴者だ。この人が番組に出演していたことは覚えていないけれど、ひょっとしたら、この人が、脚本家なのだろうか。自分の不始末を最後に詫びとは、なんて、潔いだろうか。もちろん、見えない敵はいるとしても、見えない。

「さあ。みんな、ご挨拶して」

バナナマンが促す。先頭バッターは、怪鳥コケッコーンだ。バッターと言っても、これは野球じゃないから、バットを持っているわけではない。コケッコーンは、手、いや、羽根を羽ばたかせて、「コケッコーン」と叫んで、一礼すると、すぐ後ろに下がった。

二番バッターは、怪亀カメダイだ。背中に大きな甲羅を背負い、頭を下げながら、「カメダイ。カメダイ」と礼を言った。その次は、怪物ゴミモンだった。体中に、空き缶やビニール袋、新聞紙などを引っかけての登場だ。三怪獣の中では、一番みすぼらしいけれど、一番、エコな怪物だったと思う。

ゴミモンの着ぐるみは、すぐにゴミが落ちてしまうので、ADなど、裏方の制作者たちは、ごみ拾いに大変だったろう。僕も学校で、清掃当番をしている。校庭の落ち葉を集めても、風が吹くと、落ち葉が広がったり、木から葉っぱが落ちてきて、元の黙阿弥になってしまう。永遠に続くかもしれない落ち葉拾い。まるでそんな気分だ。

ゴミモンも、「ゴミゴミ、ゴミゴミ」と小さく呟き、頭を下げると、後ろに下がった。いずれの怪獣も、僕たち子どもの夢を壊さない配慮なのか、日本語じゃなく、コケッコークコ語、カメダイ語、ゴミモン語で挨拶した。僕は、コケッコークコ語やカメダイ語、ゴミモン語がわからなかったけれど、それぞれの怪獣の態度で、相手が何をしゃべっているのかわかった。多分、まだ、中途半端な役者なので、目立つことを許されなかったのだろう。

ふと、思ったのだけれど、バナナマンだけが日本語をしゃべっている。番組中は、どんな時でも、「バナッチ」としかしゃべらなかつたはずだ。もちろん、僕には「バナッチ」としか聞こえなかつたけれど、バナナマンとしては、「よし、いくぞ」とか、「負けてたまるか」とか、「怪獣たちも可哀そうな奴らだ。全て人間が悪いのに」とか、バナナ語でしゃべっていたのかもしれない。

だけど、今は、マイクを片手に、着ぐるみ（そうだ、バナナマンも着ぐるみを着ていたのだ。バナナスーツと言う着ぐるみを着ていたのだ、僕にはわからなかつた。入れ子状態だったのだ。でも、ひょっとしたら、バナナマンの着ぐるみの下にも、もうひとつのバナナマンの着ぐるみがあり、その下にも着ぐるみがあり、どんどんどんどんバナナマンが小さくなり、最後には消えてなくなるかもしれない。

それじゃあ、本当のバナナマンはどこ？着ぐるみという皮はあつても、実は、中身がなかつた

のだろうか。じゃあ、僕たち人間も、皮を被っているけど、実は中身なんかいないのかもしれない。

そう言えば、庭に転がっていたセミの着ぐるみ、いや、死体は本当に軽かった。生きていた時は、朝早くから鳴き出し、木から木へ飛び移るほど、元気なはずだったのに。魂がなくなると、個体の体まで軽くなるのだろうか。それじゃあ、人間も同じなのだろうか。こんなに哲学的なことを、あのバナナマンの番組は教えてくれたのだ。僕はテレビに向かって手を合わせ、感謝の意を表すため、お辞儀をした。二礼二拍手一礼だ。

最後に挨拶したのが、唯一、着ぐるみを着ていない、人間だった。アル中な乱暴者たち（一人）だ。

「これまで、本当にありがとうございました」

首はうなだれ、まるで陽炎が立っているかのように、生気がなかった。あの乱暴者の雰囲気は全くなかった。今は、アルコールが切れて、放心状態なのか。僕のパパも、缶ビールを片手にソファに横たわって眠っていることがある。テーブルの上には、空缶が、ボーリングでストライクを取った時のように、仲良く倒れている。三本目はパパの手。四本目がパパ自体だ。みんな、どこからか大きなボールが投げられて、倒されてしまったのだ。だから、パパも気を失ったかのように、ソファに寝転がっている。だけど、パパは乱暴者じゃない。乱暴する前に、アルコールで気を失っているのだ。

僕が思うに、あの乱暴者が、このバナナマンの脚本家なのだろう。最後に、これまでの視聴者へのお礼と作品を書けなくなったことへのお詫びをするためなのか。でも、脚本家は、道路工事の看板のように、黄色いヘルメットも、職人の店で売られている作業着も着ていないし、満員電車で間違っても足を踏まれても大丈夫な安全靴も履いていない。よれよれの薄汚れたTシャツと洗ったことがないようなジーンズを履いている。

人は見た目じゃないと言うけれど、これでは、全く、お礼もお詫びもする姿じゃない。今、すぐにでも、テレビ局へ抗議の電話をしようかと思ったが、この番組は最終回だし、録画放映だ。電話で抗議しても、次につながらない。僕はあきらめた。

と、同時に、こんな衰弱しきっているのに、わざわざ番組に出演した脚本家に憐れみと同情と敬意を感じた。ひょっとしたら、この素振りも、脚本家や演出家が考えた結果なのかもしれない。それなら甘んじて受けよう。

最後は、見えない敵が挨拶するべきなんだろうけれど、見えない敵は僕にも見えないので、挨拶をしたかどうかはわからなかった。

全ての登場人物の挨拶が終わった後、バナナマンを始め、怪鳥コケッコーン、怪亀カメダイ、エコ怪物ゴミモン、アル中な乱暴者が、輪になると、バナナ音頭を踊り始めた。最後を締めるにふさわしいエンディングだ。踊りが終わった。祭りが終わったのだ。楽しい踊りのはずなのに、なんだか僕には寂しく、悲しく感じた。とてもじゃないけれど、一緒に踊れなかった。僕は、夢が消え、代わりに、目の前に霧が立ち込めているような気がした。決して、涙なんか、流さないぞ。

番組では、バナッチとしかしゃべらなかったバナナマンが、日本語でお礼全て話を終えると、

バナナマンの礼という掛け声とともに、出演者が一斉に頭を下げた。僕も思わず、頭を下げた。何か、テレビと僕が繋がったような気がした。僕が頭を上げた時、テレビでは、バナナマンお茶漬のCMが流れていた。ほんのり甘く、黄色い、ババナ味のお茶漬だ。バナナマンの放映が終わると、このお茶漬も売れなくなるのだろう。

「さあ、テレビ消しなさい。ごはんですよ」

テーブルの上に夕御飯が並べられた。僕の好物のとんかつだ。特に、濃厚なソースがたまらない。これだけで、ごはんが軽く二杯は食べられる。だけど、僕は「ちょっと待って」と言うと、キッチンの奥にある戸棚から、缶を取り出した、中身は、バナナマンお茶漬だ。残りは一袋しかない。

いつもなら、ママに「バナナマンのお茶漬がなくなったよ。また、買って置いて」と口にするところだが、何だか、頼むのをやめた。残りひとつの袋を持つと、食卓に着いた。そして、今日は、ごはんを三杯お代わりしようと心に決めた。